2008 年 12 月 10 日放送

領域別入門漢方医学シリーズ

ペインクリニック領域と漢方医学

昭和大学横浜市北部病院　麻酔科　教授　　世良田　和幸

（1）痛みと漢方

まず最初に、西洋医学の比較的新しい分野である麻酔科とこの漢方とは、少し奇妙な取り合わせだと思う方もいらっしゃるかもしれません。しかし、麻酔科医で現在漢方を勉強している先生は意外に多いのです。

というのも、麻酔科にはペインクリニックという痛みの治療を専門とする部門がございます。痛みの治療を行っていると、なかなか一筋縄ではいかない痛みにしばしば遭遇いたします。そういったとき、西洋医学的治療ではなくて、漢方医学的治療が奏効することは少なくありません。特に慢性の、そして難治性疼痛といわれるような西洋医学がなかなか力の及ばない痛みに対して漢方が有効なことがあります。

それでは、人にとって痛みとは、どういう意味を持つのでしょうか。人類発祥の時代より、人は狩猟や普段の生活の中で、怪我や病気などにより多くの痛みと出会ってきました。古来からある、例えばインドの「アーユルベーダ」とかアラビアの医学、またエジプトの

医学など、世界各地にあった古くからの様々な医学も、痛みとの戦いの歴史であったとも考えられます。しかし、実際には、痛みというのは目で見ることができません。また、痛みを訴える本人にしかわからないことが、痛みの治療を行ううえで大きな壁となってまいりました。痛みは、人間の体の何らかの異常に対する、いわゆる警告といいますか、警鐘反応のひとつと考えられてまいりましたが、最近では慢性的な痛みで、人にとって警鐘となりえない、不可思議な痛みもあることがわかってきています。

急性痛に対しては西洋医学的治療は奏効することが多いのですが、こと慢性痛になると、西洋医学では手に余ることが多くなります。漢方医学的治療は、こういった慢性痛に対して意外と思われるような効果があります。痛みそのものを止めるのではなく、全身のバランスを整えることによって痛みを減少させていくのが漢方薬であります。

それでは、痛みに対する西洋医学と漢方医学の違いは何でしょうか。人体の解剖や、また細胞などの病理学から発展してきた西洋医学は、レントゲンや CT などの検査、血液検査など様々な診断に使う検査を行ったにもかかわらず、その痛みの原因がわからないと診断ができず、診断名が下されないのであります。この西洋医学は、この診断名が下されないと、治療方法が決まらないのが現状であります。ですから、西洋医学では原因のはっきりしない痛みに対する治療法は NSAID、非ステロイド性の抗炎症薬などの対症療法的な、同じような画一的な薬物しか処方することができないのです。

一方、漢方医学は、痛みの原因を細かく検討することによって、例えば冷えによる痛みならば、附子と呼ばれる、体を温める漢方薬が用いられることによって治療ができますし、また体に熱感、体に熱があるような場合には、石膏といわれる、体を冷やす漢方薬が用いられることによって治療が行われています。痛みはあっても、それぞれの患者のそのときの状態によって様々な処方を行うことができます。これはまさに現代医療が目指すオーダーメイドな治療でありますし、漢方医学に対する理解を深めるうえで大変重要な点であると思います。

そこで、西洋医学が苦手な痛みも、漢方ではこうやって治せるということを少しお話ししましょう。

漢方医学における痛みに対する基本的な考え方には「通ぜばすなわち痛まず、痛めばすなわち通ぜず」という、大変有名な理論がございます。これは漢方独特の考え方であります、体内を循環していると考えられている気、血、水と呼ばれるものの流れが体の中に停滞することによって、あちこちの痛みが発生するという意味であります。この主に気、血の運行障害による痛みの発生には、例えば手術や外傷などはもちろん、体の内外からの身体的または精神的ストレスが原因であるという考えも漢方医学の特徴であります。また、本人にしかわからない痛みを、様々な自発症状や証と呼ばれる症状から分類することによって診断し、西洋医学が慢性痛に対して鎮痛薬やビタミン剤などの投与しかないのに比べて、多くの治療法があることからも、わかると思います。

痛みに対する漢方治療でよく言われるのが、漢方薬には西洋医学で言う、いわゆる鎮痛

薬は無いというふうなことが言われることがありますが、しかし漢方処方に含まれている個々の生薬、例えばトリカブトから取られる附子や、また芍薬、延胡索、呉茱萸などのいくつかの生薬、薬味は鎮痛作用を持っていますし、これらの含まれているいわゆる漢方薬によって痛みの治療を行うわけであります。

痛みに対する漢方的分類には、いくつかの痛みの病因に対する分類と、痛みの特徴による分類に主に分けられます。痛みを起こす病因には、体のまわりの環境が要因となる六淫、例えば風、寒、暑、湿などの要因がありますし、精神的な情動が原因となる、体の中からの原因である七情、いわゆる喜怒哀楽といったようなもの、それから労倦といった慢性疲労、飲食の不節制や外傷などが挙げられます。それに加えて、痛みの特徴の分類には虚と実の証に属する虚痛または実痛が挙げられます。こういったまわりの環境が原因となる外因と呼ばれる痛みや、それから七情、いわゆる喜怒哀楽を含めた精神的なストレスによる痛みが体に影響を与えることによって痛みが発生するわけです。

また、漢方の診断の下すうえにおいて大変重要なのは、痛みの部位や誘因、病歴、特徴など、いわゆる四診と呼ばれます診断法がございます。まあそういった中でも、痛みの合併症、兼症と呼ばれるような問題も診断することによって、痛みをより深く診断することによって、個々の痛みをわれわれが漢方で治すことができるわけであります。こういった様々な漢方医学的な診断によって、増強する痛みに対して、この情報から痛みに対する漢方治療が可能になります。われわれは、漢方薬を駆使することによって、いわゆる慢性痛、西洋医学では治らない、なかなか厄介な痛みに対して、本当に痛みをとってあげることが、われわれペインクリニックを行っている人間にとっても大変重要な役目を漢方はしています。